セクション５：江戸川区議・よぎさんの考え

インド出身の「よぎ」さんの本名は，「プラニク・ヨゲンドラ」です。2005 年から江戸川区の団地で生活をはじめ，今年 4 月の江戸川区議会議員に立候補して当選しました。よぎさんと毎日新聞記者の中嶋真希氏の対談動画（まいもく）「**インド出身よぎさん，なぜ区議に？**」を視聴して，各問に答えよ。

スマホの場合は，QR コードを読み取って下さい。
PC の場合は，「毎日新聞　まいもく　よぎさん」で検索するか，
アドレスバーに次の URL を入力して下さい。
https://mainichi.jp/articles/20190523/k00/00m/040/241000c

問1　動画を視聴しながら，あとの文章の空欄にあてはまる語句等を答えよ。
問2　あとの文章中の空欄 23 に関して，空欄 23 が英語で書かれている理由をインドで使われている言語に注目して説明せよ。

＊ 参考：https://india-it-school.com/inidia_hindi/

問3　よぎさんが理想とするコミュニティについて，自分のことばでわかりやすく説明せよ。

1　江戸川区リトルインディア計画（7:45～15:15）*カッコ内は動画の経過時間

- 「江戸川区リトルインディア計画」とは，2016 年ごろ，江戸川区西葛西にインドのレストラン，（1雑　　）などからなる商店街と，インドの寺院やインド人向けの（2病　　）などをつくり，西葛西にインド人コミュニティをつくるとともに，ここを観光地にしようとする計画である。よぎさんはどちらかというと（3反　　）の立場である。
- イギリス・(4ロ　　)，シンガポール，アメリカ・(5ニュ　　）などにもリトルインディアはあるが，いろいろな問題を抱えている。
- 江戸川区には約（6　　）人のインド人が住んでいるが，この計画には三つの問題点があるのではないか。一つは，インド人コミュニティの（7ニ　　）に直結していないこと。二つ目は，経済的（8サ　　）が十分考慮されていないこと。三つ目は，コミュニティが（9分　　）されてしまう恐れがあることである。
- 仕事で来日するインド人の（10　）～（11　）割は日本語ができるが，7～8 割はできない。ましてや妻や子どもといった扶養家族は日本語ができない。そのため，地域のコミュニティの中で交流ができずに（12分　　）されてしまっている。
- 「インド人コミュニティ」をつくるならば，インド人に日本語や（13ご　　）の出し方などを教育する必要がある。江戸川区の日本人からは，インド人のごみの出し方や（14騒　　）などの苦情をよく聞く。たとえば，大音量で音楽を流すことはインドでは当たり前のことなのに，日本では騒音になってしまう。
- （15Ｉ　　）関係で来日するインド人は，短期間で日本を去る。入れ替わりが激しいので，日本のルールや（16マ　　）を理解していない。日本の生活上のルールやマナーを教育して，互いの（17距　　）を縮めることが重要である。
- レストランの経営は厳しく，スタッフの給料も低い。ましてやスタッフが（18家　　）を連れて日本で生活することは無理である。日本人はバターチキンカレーや(19ナ　　）を食べるが，中華料理の頻度には及ばない。仮に，西葛西に 4～50 軒の店ができても，西葛西の中からは客がつかないだろう。土日は（20観　　）が来るかもしれないが，平日はどうするのか。もともと西葛西には 10 軒くらいのインド料理店があるが，どの店も存続は難しく，入れ替わりが激しい。
- 海外のリトルインディアに入ると，それまでの街とはうってかわって「汚い」という印象を受ける。海外よりも閉鎖的な日本の西葛西にリトルインディアができてしまうと，もともとここに暮らしてきた日本人が（21　　）か，インド人と日本人コミュニティが共存できずに（22分　　）されてしまう恐れがある。

2　自治会の役員になってわかったこと（15:16～19:22）

- ごみの問題を解決するために，よぎさんはごみの出し方を解説した(23チ　　）をつくった。2005 年に西葛西に引っ越したよぎさんは，2006 年に自治会の（24役　　）に入った。すると，行政との関係ができるだけでなく，さまざまな苦情がよぎさんに伝えられるようになった。とくに，ごみの問題は団地の中核的な問題であることを知ったよぎさんは，日本人とインド人の間に入って（25通　　）したり，インド人を集めてごみの出し方の講習会を開いたりしたこともあった。
- 子どもたちの教育問題も重要である。16 歳の息子をこれまで一人親として育ててきた。はじめは（26イ　　）に通わせていた。インターナショナルスクールにはいろいろな地域の子どもが集まるので，家の周りに（27友　　）がいなくて寂しい思いをしたはず

だ。小学 5 年から地元の小学校に通うようになると，地元の友達ができて，遊びの輪に入ることができた。しかし，友達のいない子どもは（28 ゲ　　）やテレビにばかり依存してしまうことは問題だ。

- 幸せなコミュニティとは，インド人や日本人というような（29　　）のない中で，互いにコミュニケーションをとったり（30　　）することである。

3 外国人に必要なサポートは何か（19:23～27:24）

- 江戸川区の待機児童数は，都内市区町村中ワースト（31　　）である（2018 年度）。しかし，待機児童の中にインド人の子どもは含まれていない。
- 保育園に入るためには，国籍や日本語能力は問われないが，（32 収　　）や職業の有無などの条件がある。江戸川区のインド人は（33 Ｉ　　）関係の会社に勤める人が多く，収入が（34　　）。また，母親は仕事をせずに家にいることが多い。
- 多くの母親は大卒で（35 Ｉ　　）が得意だが，仕事をしたくても保育園に入れられないから働けない。働けないから保育園には入れないという悪循環に陥っている。保育園の問題を解決できれば，母親を（36 人　　）として活用することができる。そして，働けば（37 日　　）もできるようになるだろう。
- ＩＴの仕事はプロジェクトという概念があり，（38 成　　）が完成すれば帰国するか別の国に移る。しかし，それがいつなかのか（39　　）。これが子どもを日本の学校に入れるか迷う原因だ。日本の小中学校には（40 日　　）があって，特別に日本語の勉強ができる。インターナショナルスクールの子ども達も日本語学級に通えるようなしくみづくりが必要だ。
- また，（41 保　　）に依存するだけでなく，近所のお年寄りが子育てに協力できるしくみができるとよい。同時に，自分の子どもや孫が遠くで暮らしているお年寄りの中には，地域の子ども達との（42　　）ような機会を期待している人も少なくない。

4 よぎさんが考える江戸川区の将来像（27:35～28:54）

- 江戸川区を日本人と外国人コミュニティの交流のモデルにしたい。単に「暮らしている」ではなく，（43 日　　）に交流していること，日本人と外国人が互いに（44　　）いるコミュニティをつくりたい。
- そのためには，江戸川区に暮らそうとする外国人に対する教育プログラムはもちろんだが，日本人に対する教育プログラム，たとえば外国と日本の（45 文　　）や考え方の違いが学べるような研修も大切だ。そして互いに（46　　）よい。

5 よぎさんの経歴（28:55～41:00）

- よぎさんの故郷は，西インドのムンバイ郊外の田舎で高校 1 年生まで育つ。（47　　）年に初来日，（48　　）年から日本に留学，（49　　）年から日本でエンジニアとして働く。
- 高校生のときに父親の転勤によりプネという町に引っ越した。その後，プネの大学で物理学を専攻することになったが，父親から物理学だけではなく，プラスアルファの勉強を求められた。そこで，ＩＴと（50 日　　）の勉強をはじめた。すると，物理学や数学よりも日本語が好きに

なって，ＩＴの勉強を続けながら，大学３年生の時に日本語の教師になった。

- 初来日は1997年で，1ヶ月間日本に滞在した。大阪，(51広　　)，(52宮　　)，(53京　　)，(54奈　　)，(55東　　)を周り，最後に大阪で（56ホ　　）した。日本に一目惚れして，また来たいと思うようになった。
- 中嶋氏が収録前に見た（57盆　　）の写真は，2005年か2006年に撮影されたもの。西葛西にあるUR都市機構・小島町二丁目団地に引っ越してきて，(58盆　　）を習った。これが団地に暮らすお年寄りとよぎさんを結びつけることになった。
- 日本国籍取得は（59　　）年。日本で生活してみると，日本人と外国人の壁を感じた。言語だけではなく，日本独特の閉鎖的な人間関係も壁に感じた。社会人になって9ヶ月目，とうとう（60ひ　　）に耐えきれずに帰国した。その後，2003年に再来日してからは自ら積極的に（61自　　）の役員や（62Ｐ　　）活動を引き受けたことが日本国籍を取得しようとした理由の一つである。
- そして一番大きな理由は，(63　　）年の東日本大震災である。この時，みずほ銀行に勤めていた。(64大　　）の銀行から団地に徒歩で帰宅後，自治会の役員として倒れた（65家　　）を元に戻したり，(66ガ　　）や電気の復旧作業などに追われた。その後，数日間は困っている（67イ　　)人を助ける中で，コミュニティやネットワークができていないことに気づいた。多くのインド人は，(68家　　）からの要請もあって帰国したが，よぎさんはこのまま日本に住み続けたいと思うようになった。

６　レカと江戸川印度文化センター（41:01～49:13）

- 中嶋氏は収録前に「レカ」のマトンビリヤニ，カレー，(69チャ　　)を食べた。(70ナ　　）は北インドにはあるが，決して定番ではない。
- レカができたきっかけは，(71　　）年にインドから母親が来日したときのこと。よぎさんと母親の二人が同時にインフルエンザにかかってしまう。食事の用意ができないため，よぎさんの息子はいつもバターチキンカレーとナンを買ってきた。そこで，母親が日本でレストラン経営を発案。10月に会社設立，翌2013年2月にレカを開店した。店では（72家　　）に限定したメニューにして，他店との差別化を図った。その後家庭料理ではないが，他店ではほとんど提供しない（73ビ　　）をメニューに加えた。
- 江戸川印度文化センターでは，インド独特の楽器を習うことができる。(74タ　　）という打楽器があるが，教える先生は（75日　　）である。